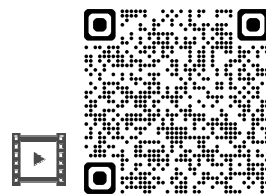


# ギターコードの仕組み

音楽理論 T003



## 目的

音楽理論を知らなければ作曲やアレンジができないというわけではありません。しかし理論的背景がないまま、感性だけを頼りに楽曲を組み立てようとすれば、かえって遠回りになることも事実です。作曲やアレンジにつながる“使える音楽理論”を身につけながら、効率的にアコギを練習する方法を考えてみましょう。

### POINT

- 作曲やアレンジにつながるアコギの練習法を探る
- ギターコードの仕組み～基本のCメジャー・コードの場合～

アコースティックギターを手にしたとき、どうやって練習したらいいのかを訊(たず)ねると「とにかく曲をたくさん練習するといい」という答えが返ってきました。そこで言われたとおりに何曲も練習してみたのですが、さっぱり上達した気がしませんでした。

基本的なコードは押さえられるようになりましたから、指もそれなりに動きます。たしかに簡単な伴奏ならつけられるようにはなりました。しかし作曲やアレンジにつながる“引き出し”が増えていたわけではなかったのです。

《課題曲を弾いているうちに、“使える音楽理論の知識”や“演奏の引き出し”が同時に増えていく練習法があればよかったのに…》



そんな風に思った苦い経験はありませんか？

### Comment

#### 【理論と実践について】

“使える音楽理論の知識”や“演奏の引き出し”が同時に増えていく練習法を探しはじめたとき、その手がかり足がかりとなってくれたのは、岩下潤さんの『弾きながら覚える アッと驚く独奏アコギの全知識』という教則本でした。

そこには作曲やアレンジにつながる音楽理論が極めて簡潔に書かれていたのです。ただし、これは初心者の頃なら誰にでもありがちなことでしょうけれど、いわゆる「宝の持ち腐れ」で、はじめは簡潔すぎるためにかえってこの本の価値を理解できませんでした。ところが、ある程度アコギの練習を進めてから読み返してみると、本当に使える音楽理論のみがキッチリまとめてあることが分かってきたのです。

昔の寺子屋の寺子は、「論語」などの難解な漢文の一節が自然に口をついて出てくるまで、繰り返し誦(そら)んじたものだそうです。寺子屋に通っているあいだは特に意味を教わることもなく、ただ「覚えろ」と言われて過ごすのですが、寺子屋を後にして数年経ったときから効果が出はじめます。あるとき、たとえば饅頭を食いながらお茶をすすっているときに忽然(こつぜん)と意味が腑(はら)に落ちてくるのです。それは、「人生の歳月」が「論語」の行間にあった空白の言葉を埋めるからなのかもしれません。

こうした寺子屋学習的な側面がアコギの練習にもあり、理論と実践がリンクするまでには闇雲に練習

を続けなければならない空白の歳月が必要不可欠のような気もします。とはいっても、「論語」という理論の基礎があったからこそ、「人生の歳月」という実践の場でその意味が立ちあがったように、やはり音楽理論の基礎を無視して練習という実践の場に入っていくのは得策ではないと思われます。

音楽理論をはじめに教わることなく、いきなり曲を練習しはじめたとしたら、それはガイドブックも持たずに知らない土地を旅行をするようなものでしょう。おそらく目的地に到達するまでにうんざりするような遠まわりをすることになります。なぜなら、たった十曲ほど練習するだけでも応用力に明らかな差がつくからです。

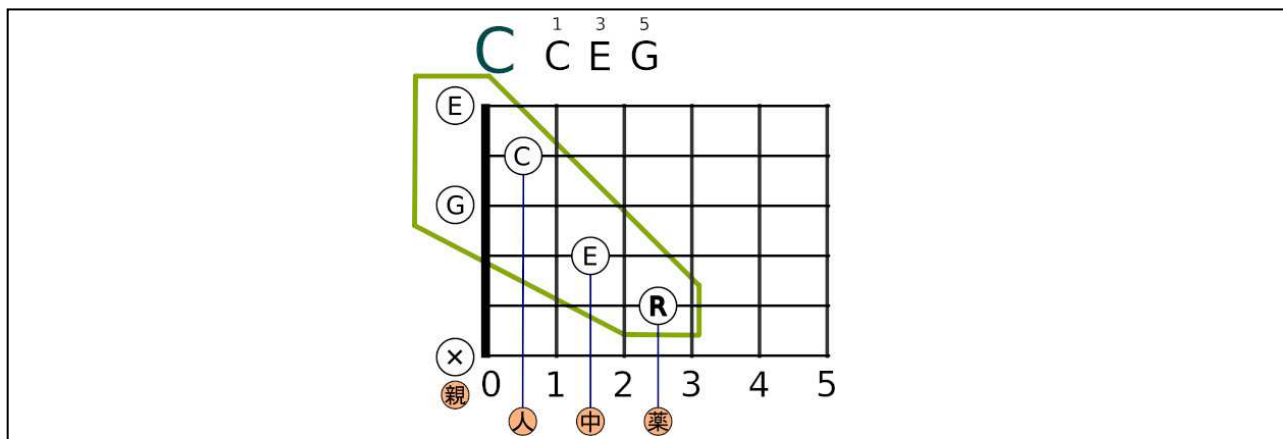
ここからは数回に分けて、本当に使える音楽理論を解説していきます。まずは「ギター・コードの仕組み」を知っておきましょう。

## Comment

### 【 ギター・コードの仕組み 】

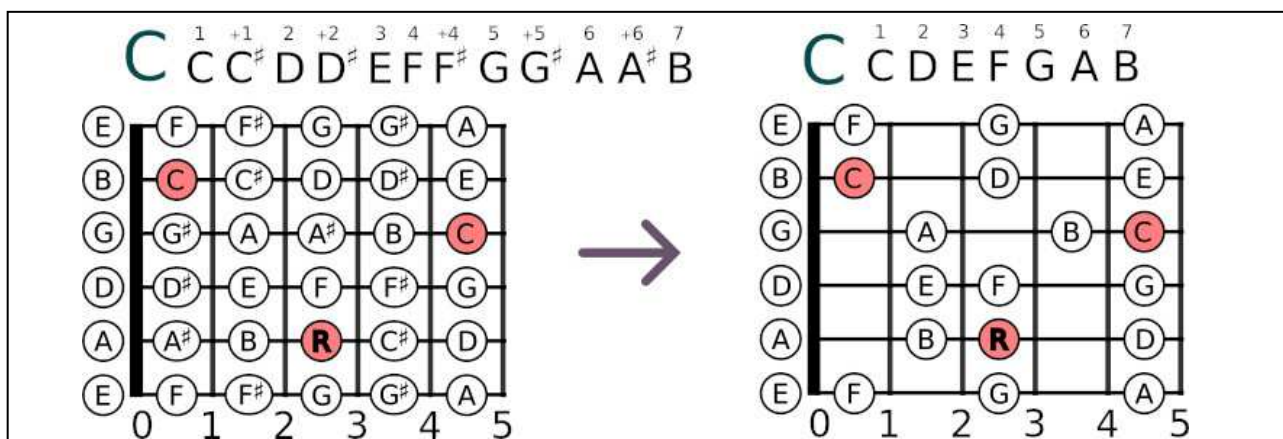
ギターのコードはCAGED(ケイジド)システムとして知られる5つの基本フォームから作り出すことができます。つまり5つの基本フォームを覚えてしまえば、コード・ブックを辞書のように引いて暗記していく作業から解放され、自分でコードを導き出せるようになるのです。

#### 基本のCメジャー・コード



CAGEDシステムの5つの基本フォームのひとつ「C型C」は、上図のような…おそらく誰もが最初に覚えるであろう「基本のCメジャー・コード」のことなのですが、このコードを導き出す過程を学べば、どんなコードでも自分で作り出せるようになるはずなので、その仕組みを知っておきましょう。

#### Cメジャー・スケール(別名：Cイオニアン・スケール)



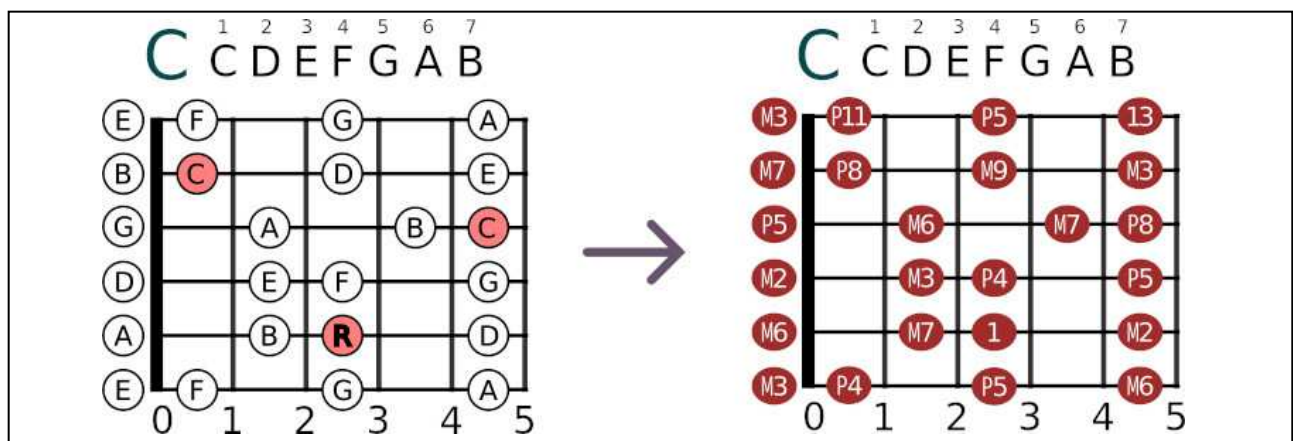
ギターの5弦3フレットのC(ド)の音を基準にしたとき、指板上にはC・C#・D・D#・E・F・F#・G・G#・A・A#・B(ド・ディ・レ・ロ・ミ・ファ・フィ・ソ・スイ・ラ・リ・ティ)の12音(ドデカトニック)

そこでC・D・E・F・G・A・B(ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・ティ)の七音(ヘプタトニック)を抽出すると、上図・右のようなCメジャー・スケール(別名:Cイオニアン・スケール)が指板上に見えてくるのですが、これは[全-全-半]-全-[全-全-半]から成る音階の構成音を縦に拾い出したものと言えます。

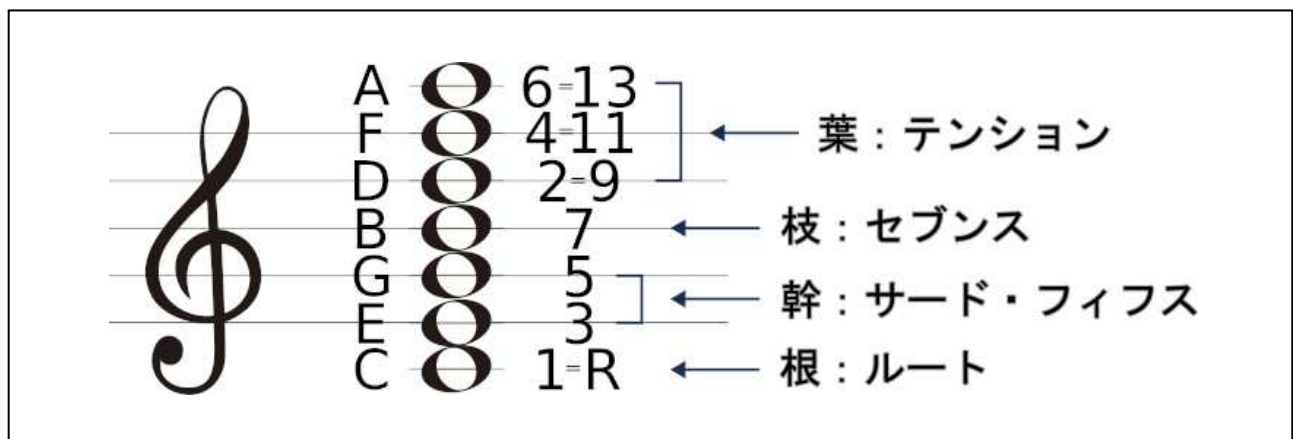
C<sub>(major)</sub> 1 2 3 4 5 6 7  
C D E F G A B

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

### ■ Cメジャー・スケールの度数



## ■ Cメジャー・コードの三度堆積



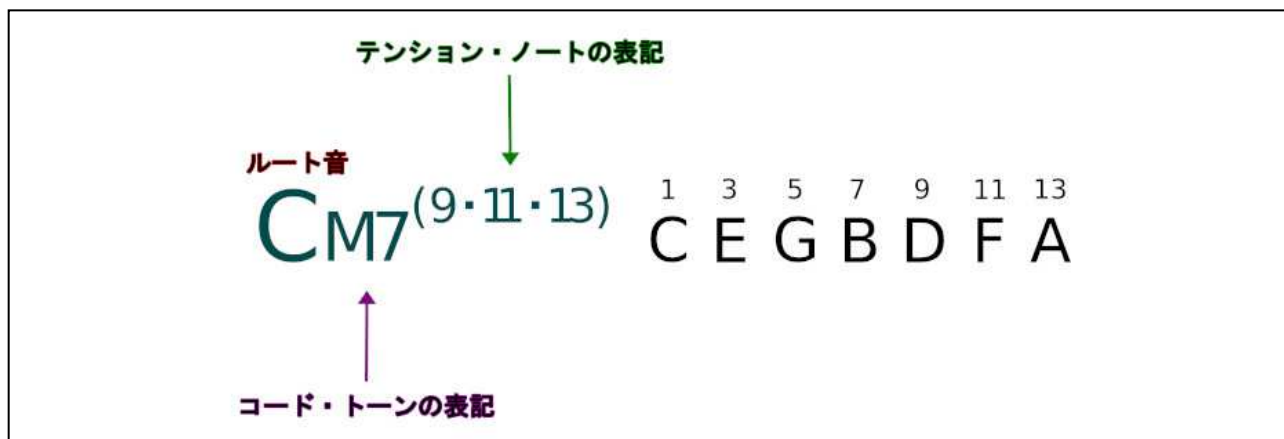
コードは七音から成る音階(スケール)の構成音を三度の音程で積み重ねることによって作られ、それぞれの音を樹木に譬(たと)えることができます。たとえばコードの一番下の土台となる1度の音は、木の根になぞらえて根音(root: ルート)と呼ばれます。その上に三度堆積で幹や枝葉を積み上げていくイメージです。

木の幹となるのが3度(3rd: サード)と5度(5th: フィフス)の音で、これらと1度の音を合わせた三和音はトライアドと呼ばれ、コードの骨組みを形成します。

次に木の枝とみなされるのが7度(7th: セブンス)の音で、トライアドの三和音に7度の音を加えた四和音(しわおん: テトラッド)はコード・トーンと呼ばれます。

そして木の葉にあたるのが2度(9th: ナインス)や4度(11th: イレブンス)や6度(13th: サーティーンズ)の音でテンション・ノートと呼びます。2度や4度や6度と言っても間違いではありませんが、9thとか11thとか13thと呼ぶのが慣例のようです。

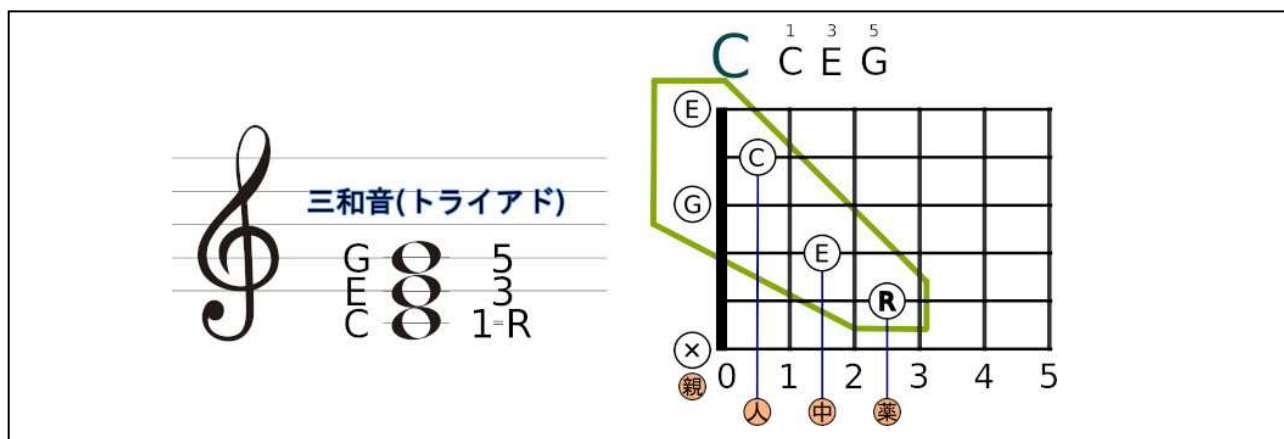
## ■ Cメジャー・スケールのコード表記



Cメジャー・スケールの三度堆積をそのままコード表記するなら上図のようになるはずですが、もともと6本の弦しかないギターで七音全部を弾くことはできませんし、そもそも和音が濁ってしまうので、通常は必要な音だけを抽出してコードを鳴らします。

そこで三和音(トライアド)のみを抽出したコードが基本のCメジャー・コードというわけです。

## ■ 基本のCメジャー・コードと三和音(トライアド)の役割



上図のように、基本のCメジャー・コードは1度のCと3度のEと5度のGの三和音(トライアド)で構成されています。それぞれの音にはコードにおける機能や役割があるので覚えておきましょう。



## 三和音(トライアド)の機能

### 1度(根音 : root)

コードの土台となる音

### 長3度(Major 3rd)

明るい印象のメジャー・コードを作る音

### 短3度(minor 3rd)

暗い印象のマイナー・コードを作る音

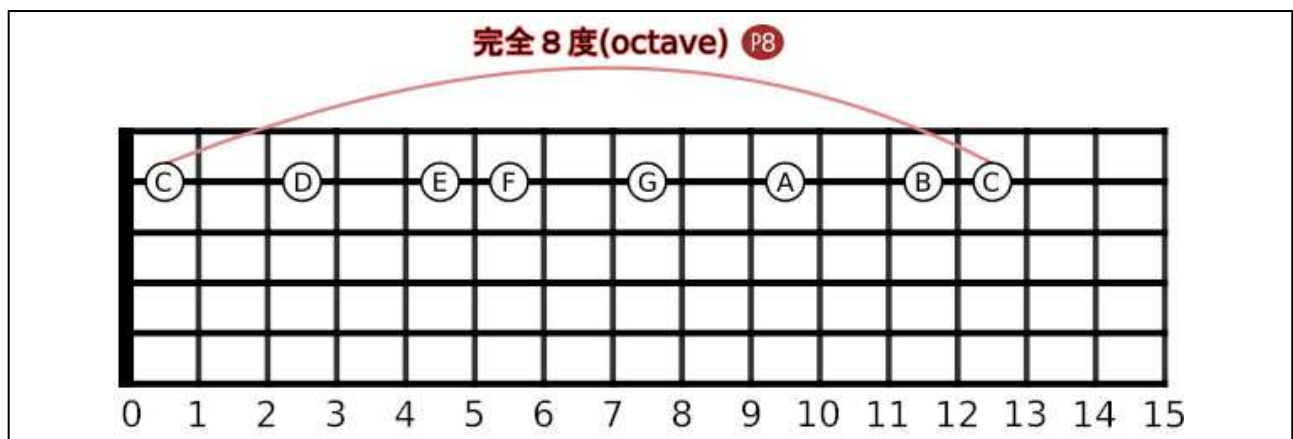
### 完全5度(Perfect 5th)

コードの響きに厚みをもたらす音

まず1度の音は、根音(root)と呼ばれるようにコードの土台となる音です。コードは、この土台の上に七音から成るスケールの構成音を積み重ねることによって作られます。

1度から12フレット離れた8度の音も同じ音なのですが、1度からの音の距離を表す場合は、完全8度(オクターブ : octave)と呼んで区別します。

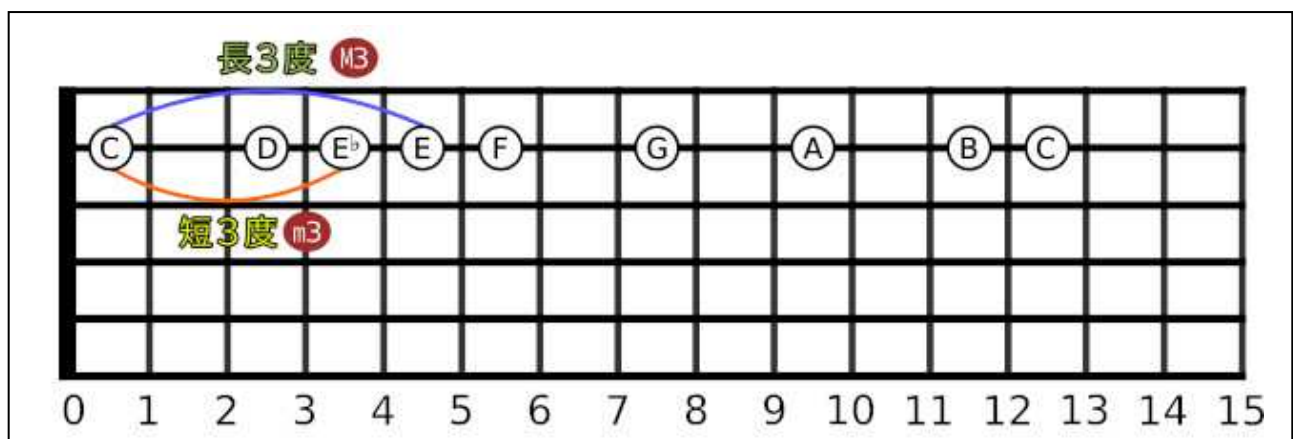
## 完全8度の音程



3度の音は、コードの印象を決定づける音で、長3度(Major 3rd)を用いると明るい印象のメジャー・コードとなり、短3度(minor 3rd)なら暗い印象のマイナー・コードになります。

長3度と短3度というのは1度から3度までの音程を表す用語です。ギターの指板上では下図のような関係にあるのですが、4フレット離れた音程が長3度、3フレット離れた音程が短3度です。

## 長3度と短3度の音程

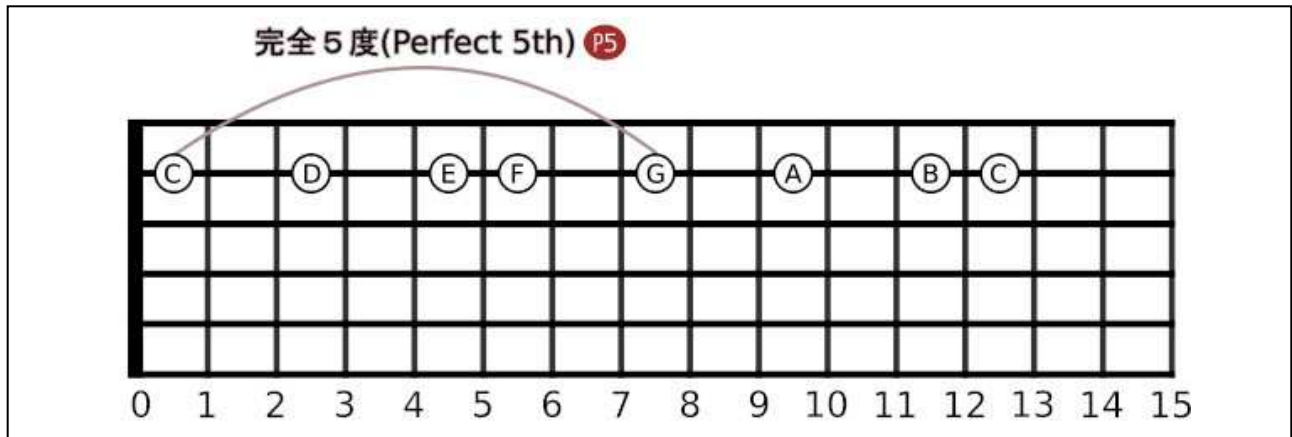


5度の音は、ギターの指板上では1度から7フレット離れた位置にある音程です。

3度の音のようなコードの印象を決定づける機能はないため、長・短の区別はありません。そのブレない性格から「完全5度(Perfect 5th)」と呼ばれます。

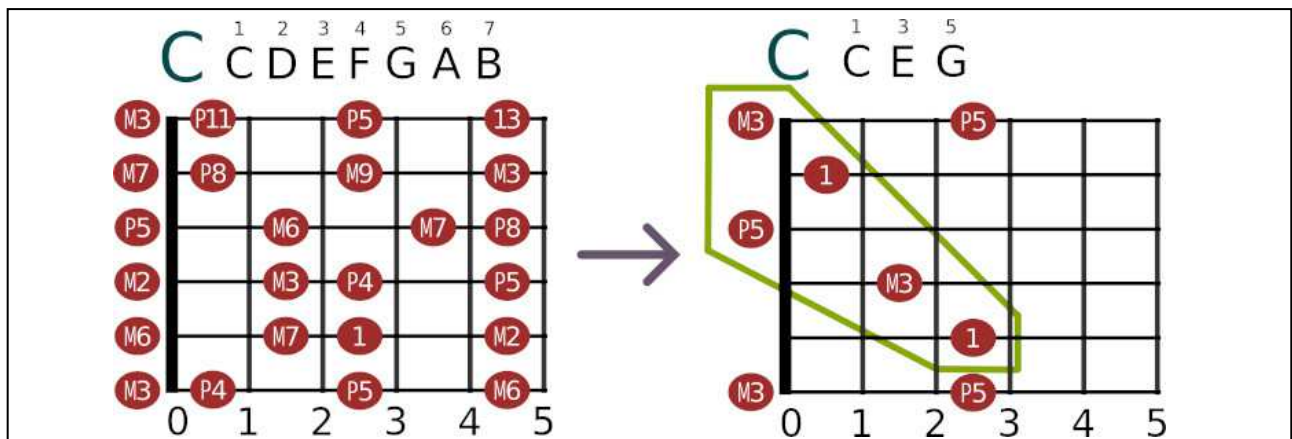
省略してもコードの印象が変わらない特性を持つので、軽快でスッキリした響きを得たいときやコード・チェンジが大変なときには、あえて5度の音を弾かないという選択肢もあります。逆に言えば、5度の音を加えることによってコードの響きに厚みをもたらすことができるわけです。

## 完全5度の音程



これら1度と3度と5度の三和音を指板上に抽出すると、Cメジャー・スケールから基本のCメジャー・コードを導き出せます。

## 三和音(トライアド)の抽出



以上のように、コードは七音から成る音階(スケール)の構成音を三度の音程で積み重ねることによって作られます。また1度と3度と5度の三和音(トライアド)がコードの骨格を形成していることから、基本のCメジャー・コードのような三和音のフォームにスケールの他の音を足していくという発想で、どんなコードでも作り出すことができるのです。

このような三和音の型はC・A・G・E・D(ケイジド)と呼ばれる5つの基本フォームに集約されます。つまり、これまで導き出してきた「C型C」以外にも「A型C」「G型C」「E型C」「D型C」を想定できるということです。

ということで次章では、C・A・G・E・D(ケイジド)システムとして知られる5つの基本フォームを確認していきましょう。